漱石文学の全貌

下巻

著者略歴

宮井一郎（みやい　いちろう）

明治28年3月、島根県生まれ。慶応大学中退。

主著　『漱石の世界』（昭和42年、講談社）

『現代作家論』（昭和45年、東洋出版社）

『夏目漱石の恋』（昭和51年、筑摩書房）

『詳伝　夏目漱石』上下巻（昭和57年、国書刊行会）

漱石文学の全貌　下巻

昭和59年5月15日　印刷

昭和59年5月25日　発行

定価 6,500円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著者　宮井一郎

発行者　佐藤今朝夫

制作・高科栄次郎

〒170　東京都豊島区巣鴨3-5-18

発行所　株式会社　国書刊行会

電話（917）8287（代表）振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。　印刷・セイユウ写真印刷㈱　製本・青木製本

上巻の内容

第一章　漱石文学の独自性
作家以前の作家的底流／漱石文学独自の三点／漱石の象徴的手法／漱石文学は恋愛体験の変容
第二章　漱石文学の出発点
『吾輩は猫である』『幻影の盾』『琴のそら音』『一夜』『薤露行』『趣味の遺伝』
第三章　傍系的な、並びに試行的な作品
『坊っちゃん』『二百十日』『野分』『坑夫』
第四章　浪漫的作品の終焉と近代的文学の序曲
『草枕』『虞美人草』『夢十夜』
第五章　恋は天上のもの
『三四郎』『それから』『門』

漱石文学の全貌　下巻／目　次

第六章　我執三部作
1　『彼岸過迄』……2
2　『行人』……53
3　『心』……89
第七章　婚姻は地上のもの、恋愛は天上のもの
1　『道草』……122
2　『明暗』……192
(1)　『道草』との対応関係……192
(2)　漱石の原体験と『明暗』……196
(3)　『明暗』のテーマ……216
(4)　テーマの展開……224
(5)　『明暗』の技法と「則天去私」……232

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(6)『明暗』の構成……241
(7)結語と補遺……249
第八章　漱石の俳句（評釈秀句百撰）……257
第九章　漱石漢詩現代訳……303
あとがき……443

第六章　我執三部作

1　『彼岸過迄』

(1)

漱石は『門』脱稿の翌日、明治四十三年六月六日、胃潰瘍で長与胃腸病院へ入院した。そしてそのあと転地療養先の修善寺で、一時は危篤状態になった。しかし辛うじて一命をとりとめて帰京、やはり同じ病院で療養し翌年二月全快して帰宅した。その間、十月の末から翌年にかけて、大患の白書ともいうべき『思ひ出す事など』を書いている。

多くの漱石研究家は、この修善寺大患によって漱石のいわゆる悟達がなされ、その直線上に、「則天去私」の境地や、『道草』『明暗』の漱石文学の最高峰があるものとしている。しかし一方には正宗白鳥氏の皮肉な観察を踏まえて、上記の説に否定的な江藤淳氏がある。同氏は、大患の「影響は（中略）長編作家である生活者漱石の上にではなく、生活から遁走を試みようとする彼の心の深層に投影された事件なのである。」「修善寺で得た漱石の至福が（中略）いわば植物的な静寂であることを思えば、彼にとってこの境地は、倫理とも神とも救済とも絶縁された別の次元のものであった。」（『夏目漱石』）というのである。

なるほど『思ひ出す事など』のなかには、「人よりも空、語よりも黙」という風な言葉や、ドストエフスキーの「神聖なる疾」の一瞬の「一種微妙な快感」になぞえた、「縹渺とでも形容して可い気分」になることなども書いてあり、俳句や漢詩も多く点綴されているから、それらの点だけをみれば、「植物的な静寂」ということができるかも知れない。しかしそれはいわば一面的な解釈であって『思ひ出す事など』は、実はもっと複雑な内容と、もっと深長な示唆を含んでいるのである。

たとえば江藤氏が「超倫理（アンモラル）」の原点としている「修善寺で得た漱石の至福」なるものは、「杏な心に些の蟠りのないとき丈、句も自然と湧き、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。さうして後から顧みると、夫が自分の生涯の中で一番幸福な時期なのである。」（『思ひ出す事など』、傍点宮井、以下同じ）という一節などから帰納したものであろうが、ここでは特に最初の「杏な心に些の蟠りのないとき丈」という、その「とき丈」の限定に留意すべきである。何故にその「とき丈」が「自分の生涯の中で一番幸福な時期なのである。」のか。それは次の文章が端的にこれを明らかにしてくれる。つまり句や詩は、「実生活の圧迫を逃れたわが心が、本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然と漲ぎり浮かんだ天来の彩紋である。」からなのだ。すなわち「本来の自由に跳ね返つた」から、そこに句も湧き詩も浮かび、「生涯の中で一番幸福な」江藤氏のいう「修善寺の至福」がもたらされたというのである。

だから端的にいえば「本来の自由に跳ね返つ」た時だけが、「生涯の中で一番幸福な」ときなのだ、ということである。句や詩は、病後の気力の衰えた故の「天来の彩紋」である。もし気力盛んなときなら、そういう自由の境地において、当然に長い小説執筆も可能だった筈である。

これは決して「植物的な静寂」などというものではない。漱石が続いて展開する思考は、明らかにそのことを裏づける。それは、「そうしてこの幸福な考えをわれに打壊す者を、永久に敵とすべく心に誓つた。」という一節である。このような決意が「植物的な静寂」などでないことはいうまでもあるまい。

実にこの純粋な自由享受の幸福感と、それを「打壊す者を、永久に敵とすべく心に誓つた。」ということが、いわば大患の白書である『思ひ出す事など』の主題なのである。だから大患の悟達というものが、もしあるならば、このことをおいて他にはない筈である。もちろん悟達というにはあたらない、あまりにもなまなましい思考である。

もはやいうまでもないが、これは「生活から遁走を試みようとする」ものでもなく、また「倫理とも神とも救済とも絶縁された別の次元のもの」でも決してない。むしろ漱石の心のなかに、「倫理」と「神」と「救済」とが、新しい姿で誕生したのである。そしてこの至福をもたらした「自由」と、それを「打壊す者」、すなわち我執こそ次の三部作『彼岸過迄』『行人』『こころ』の主題をなすもので、修善寺大患と、その白書ともいうべき『思ひ出す事など』は、これらの我執を主題とする作品の、いわば苗圃の役を果たしたものであった、といわなければならない。「漱石の至福」を「打壊す者」すなわち我執という命題については、すぐあとで触れるつもりである。

江藤氏の説とまさに正比例して、他の多くの研究家は、漱石は大患によって、我執の域を解脱してそこに静寂円満な境地に遠する契機をつかんで、やがて「則天去私」の心境に直通する大道を往くもののように解釈している。しかしそんなことは一言も『思ひ出す事など』は語っていない。上記のように漱石は大患によって、ようやく我執を敵として戦うべく決意したばかりである。彼が「則天去私」の手がかりを得ることができるためには、まだ『行人』や『こゝろ』の時点の血みどろな苦悶を経なければならない。

さて大患の予後にある漱石が、「病に生還ると共に、心に生き還った」その温い病床から、「殺伐の気に充ちた」社会で、「互殺の平和を見出そうと」「必死の努力」をした過去を振り返って、そこに見たものが「悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社会は不正で人情のある敵である。もし彼対我の観を極端に引延ばすならば、朋友もある意味で敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。そう思う自分さえ日に何度となく自分の敵になりつつある。」と考えたことは、いわばまことに至当な思惟である。ましてこれは『猫』のなかで独仙の言葉として書いたもので、当時から漱石の心の底深く、くすぶっていた黒い焔であってみればそれは尚更のことである。

彼の心が、純粋に自然で自由であればあるほど、振り返る「互殺」の世界は、残酷であり、苦渋であり、醜悪であ

る。それらのものの根源するところは、全ての自己も他者も引っくるめた人間そのものに内在する我執である。彼はほとんど肉体的にまでそのことを痛感する。そして人類のために、あるいはむしろ自己のために、これは一体どうすれば良いのだ、とほとんど絶叫せざるを得ない心境に立つ。そのことを漱石は、「この幸福な考えをわれに打壊す者を、永久に敵とすべく心に誓った。」と表現したのである。

だからこの「永久に敵とすべく」とは、いうまでもなく「彼対我」の、彼我の心に巣くう「我執」である。我執の他に彼の純粋に自由な幸福感を、打壊す敵を発見することはできない。このようにして漱石は、彼のイデーである自然な自由の、純粋無碍な姿を通じて、改めて我執との対決を決意せざるを得なかったのである。そういう人間存在の底辺からこそ、真実の人間の幸福を探求しなければならないと覚悟したのだ。これこそ「心に生き還った」文学者漱石の、大患の至福に対する負責の途だったのだ。

そしてこの場合もいろいろある我執の中で漱石が撰んだのは、やはり恋愛に関係する嫉妬であった。嫉妬は肉体的と精神的と両面からする感情で、我執のなかでも最も深刻なものである。漱石の原体験では、その恋愛のライバルは「女」のパトロンであり、彼女の愛は全面的に漱石にあったのだから、嫉妬など起ることはないようなものである。が、やはりそうはいかない。漱石の句に、「別恋」と題して、

見送るや春の潮のひたくに

という一見何気ない句があるが、これに特に「別恋」と題したところに漱石の感情をみることができる。この句は「女」とデートのあとで、おそらくは柳橋の大川端で別れる時の句である。それは、「春の潮」や「ひたくに」によって明らかである。「ひたくに」は柳橋河岸の石垣に折からの上げ潮がさざ波を押し寄せてくる大川端の状況を詠んだものであるが、うしろ姿を見せて帰って行く女に、帰宅後に当然一緒になるであろうパトロンの姿が重なって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

漱石の心には、どうすることもできない深い妬心が渦巻いている。そういう経験は一再ならずあった筈である。漱石は例によってその「妬心」を核心として、きわめて深刻な「嫉妬」の異なった三つの状況を、『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』の三つの作品に、それぞれ作品独自のモチーフを加えて創造している。

(2)

周知のように『彼岸過迄』の単行本には、亡友池辺三山氏と、亡五女雛子さんへの献辞が書かれている。前者は『朝日新聞』の主筆であったが、森田草平氏に関することに端を発して、その前年『朝日新聞』を辞職している。そのとき漱石も一緒に辞表を提出したのだが、三山氏も含めての社内の慰留勧告のため、漱石だけは辞表を撤回したという経緯がある。漱石が『朝日』に入社するについての直接の発議者は、『大阪朝日』の鳥居素川氏であるが、入社後の交わりはむしろ三山氏の方により親しく、両者の交わりはいわゆる爾如の交わりであった。漱石が大患後病院で『思ひ出す事など』を書き出したときは、体に障るからそんな軽挙をするなと、三山氏がおこって執筆を差し止めたということもあった。明治四十五年二月二十八日死去した亡友に対して、漱石はいち早く三月一日『三山居士』を『朝日』紙上に発表して追悼している。そのなかに「池辺君の容体が／とうく絶望の状態迄進んで来た時は、余が毎日の日課として筆を執りつゝある『彼岸過迄』を漸く書き上げたと同じ刻限である。池辺君が胸部に末期の苦痛を感じて膏汗を流しながら藻掻いてゐる間、余は池辺君に対して何等の顧慮も心配も払ふ事が出来なかつたのは、君の朋友として、朋友にあるまじき無頓着な心持を抱いてゐたと云ふ点に於て、如何にも残念な気がする。」と書いている。『彼岸過迄』一巻を、この浅からぬ因縁のある亡友に捧げるのは、まことに当然のことであろう。

五女雛子さんについては『日記』のなかで、明治四十四年十一月二十九日から、その急死、通夜、葬式、骨揚げ、

十二月四日の逮夜まで残りなく詳しく書いている。そしてそれをほとんどそのまま作品化したのが、『彼岸過迄』の一章「雨の降る日」である。『日記』のなかには「生きて居るときはひな子がほかの子よりも大切だとも思はなかった。死んで見るとあれが一番可愛い様に思ふ。さうして残った子は入らない様に見える。」あるいは「自分の胃にはひびが入った。自分の精神にもひゞが入った様な気がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思ひ出す度に起るからである。」と書いている。おそらく当時の漱石の飾りのない真情であろう。『彼岸過迄』で、ひな子さんを原型とする「宵子」の父である松本が、雨の降る日には客に逢わないというのも、「宵子」の死んだのが雨の降る日であったから、それが上記のような「精神のひゞ／回復しがたき哀愁」を刺戟するからである。

ひな子さんと『彼岸過迄』とはまたつぎのような因縁もある。「『雨の降る日』につき小生一人感懐深き事あり、あれは三月二日（ひな子の誕生日）に筆を起し同七日（同女の百ヵ日）に脱稿、小生は亡女の為好い供養をしたと喜び居候」（明四十五・三・二十一中村蓊氏宛書簡）ということである。この中村氏は雛子さんが急死したとき、偶然に漱石宅に来合せた人である。一歳八ヵ月余りの幼い命の昇天に対しては、漱石もあらゆる手だてをつくして鎮魂の思いを現したかったのであろう。

ところで亡友と亡女への献辞とともに、文字に書かなかった、もう一人への献辞を、漱石は胸中に深く抱いていた筈である。それは『彼岸過迄』のヒロインである千代子の原型、すなわち小品『心』の「女」、漱石が「追羽根や君稚児髷の黒眼勝」と詠んだその人にたいしてである。

従って千代子も作品の「形式上」の主人公敬太郎によって、その容貌風姿をほとんど余すところなく観察されている。だからその眼についても、「晴々しい心持のする眸を有ってゐた。」（「停留所」二十七）と書き、さらに「潤沢の饒かな黒い大きな眼を、上下の睫の触れ合ふ程、共に寄せた時は、此女から夢にも予期しなかつた印象が新たに彼の頭

に刻まれた。」（同前三十、傍点宮井）とあってきわめて印象的である。また別のところでは「最も鋭敏に動くものは其眼であらうと彼は疾くに認めてゐた。」（同前二十九）とも書いていて、そこに彼女の凡その精神生活の態様をも見ようとしている。まさに「黒眼勝」を内面的にまでとらえたものであろう。

そのほかの容姿の描写でも作者は強く原体験の「女」を意識している。そのなかから特徴的な点だけを書いておきたい。「女は年に合はして地味なコートを引き摺る様に長く着てゐた。／身の周囲には何といつて他の注意を惹くものを着けて居なかつた。」（同前二十七）しかし一つだけ注意を強いられたのは手袋であった。それは「きちりと合ふ山羊の革製ので、華奢な指をつゝましやかに包んでゐた。／肉と革がしつくり喰付いたなり、一筋の皺も一分の弛みも余してゐなかつた。」（同前）というきわめてダンディな好みのものである。これについて敬太郎は「女が旦那から買つて貰つた革の手袋を穿めてゐる洋妾の様に思はれた。」（同前三十五）という「空想」を「不図」起している。作者がパトロンのある原体験の「女」を、そのぎりぎりの線まで描き出そうと考えていることが、この「洋妾」という言葉によってきわめて印象的に示されている。

このように見て来た敬太郎は、当然に「此女は処女だらうか細君だらうか」（同前二十九）と考える。「見懸からいふと或は人に嫁いだ経験がありさうにも思はれる。／女の身に着けたものゝ内で、纔かに人の注意を惹くのは頸の周囲を包む羽二重の襟巻丈であるが、夫はたゞ清いと云ふ感じを起す寒い色に過ぎなかつた。」（同前）だから敬太郎は、「余りに媚びる気分を失ひ過ぎた此衣服を再び後から見て、何うしても既に男を知つた結果だと判じた。其上此女の態度には何処か大人びた落付があつた。彼は其落付を品性と教育からのみ来た所得とは見做し得なかつた。家庭以外の空気に触れたため、初々しい羞恥が／自然と抜けて仕舞つたのではなからうかと疑ぐつた。」（同前）というところまで考える。この後段は明らかに世間ずれ人ずれのした玄人の女のイメージである。

以上の断片的に引用した描写は、「二十七」の終りの方から「三十」の初めの方までまたがる実に詳細なものの中からである。そして例によって漱石の微妙な筆つかいで、一面では山の手の令嬢か若奥様ともとれるし、またもう少し鋭く読んだなら、これは自分とは相当年長のパトロンを持った女、ということにもなる。作者は明らかにそのすれすれの微妙な線上にこの女を描いている。それはたとえば前者ならば、細君とか奥様とか書けばそれでよいところを、一度はそう書いて、二度目には「男を知つた結果」などという、この作品の世界とは全く異質な語彙を使っていることからも、また先ほどの手袋の描写からもそれを証することができる。

なぜ作者はそのような描写をしたか。もちろん彼自身の恋愛体験の「女」の姿をもう一度精細に描いておきたかったからである。それはこの作品をもって「黒眼勝」の「女」を単純に原型とするヒロインを描くことは、おそらく終りであろうと考えているからである。ということは、また一面では自己の恋愛体験を直接に作品化することもこの『彼岸過迄』をもって、一応打ち切りにするつもりだということも考えていたわけである。

だから漱石は他の『行人』『こころ』と共通のテーマである「嫉妬」にからませて、同時に須永と千代子によって、原体験において「女」と袂を分かたなければならなかった理由のうち、最も重要な内面的な真実の理由を語ろうとする。従って、そのためには当然のことであるが、千代子をできうる限り原体験の「女」のイメージに近づけておきたい。そうすることによって初めて漱石の筆は伸びる。そして漱石の「女」への鎮魂の想いも充足される。それ故にこそ先ほど断片的に示したように、一面では作品のプロットに添うて、山の手の令嬢とも若奥様ともとれるような姿に描き、しかし鋭く読めば一方では、粋で高等な花柳界に関係のある、敬太郎のいう「洋妾（らしゃめん）」と見ることもできるような姿に、そういう両面のすれすれの線上に描写の視点を定着したわけである。

そのためには敬太郎は実に重宝な存在である。あんなふうに千代子を前からも見、また背後からも眺め、すぐこの

あとで触れるように、横からも観察する、というようなことは彼のような立場にある人物でなくてはできないことである。たとえそれができても不自然である。仮に作者が地の文でこれを書いたとして考えてみればそのことはきわめて明瞭である。この点においては敬太郎の創造は作者の成功である。この敬太郎についてはその否定論が従来圧倒的であったが、最近大岡昇平氏はその有用論を積極的に展開している。（昭四十九・八『展望』）

もとより老巧な作者は、千代子を二重性のまま放ってはおかない。原体験の「女」の姿を髣髴せしめる一応の効果をおさめたあとは、一転して彼女を小説世界のヒロイン像に塗りかえてゆく。

敬太郎は／ペンキ塗の交番を楯に、／横から女の顔を覘ふ様に見た。さうして其表情の変化に又驚ろかされた。／斯うして彼女の知らない間に、其顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新らしい人に始めて出逢った様な気がしない訳に行かなかった。要するに女は先刻より大変若く見えたのである。（『停留所』二十九）

このようにして千代子像の完成とともに、漱石は原体験の「女」と真実の決別をしなければならない。明治二十八年「女」と袂を別って松山へ去ったのは、いわば現身だけの仮の別れであった。それ以後「女」は漱石の深層でより以上の強い力で生き続けてきた。しかしこの『彼岸過迄』でそれも最後である。すでに恋愛体験について、直接には書くべきモチーフを書きつくしてしまった以上、そのヒロインの出る場はないわけである。もちろんつぎの作品から後も、何らかの形で恋愛体験は生かされるかも知れない。しかしそれはきわめて部分的にであるか、あるいはかなり変容されたものになる筈である。従ってヒロイン像も他の要素が、たとえば夫人鏡子さんや、亡くなった嫂のイメージなどが加わって、原体験の「女」の面影は、大変稀薄なものにならざるを得ない。

というわけであるから『彼岸過迄』において、もう一人の文字に書かれなかった献辞は、小品『心』の女、すなわち漱石の恋愛体験の「女」に対してであることは間違いない。それなればこそ先ほどから詳説したように、少しの無理には眼をつぶってまで、その「女」の面影を、千代子像のうちに再現するという無理な手法も弄したのだ。

そしてそのことと全くパラレルに、漱石は原体験におけるあらゆる記念すべき事物について、きわめて強い感傷を制することができない。従って『彼岸過迄』にはそういう痕跡が大変に多い。漱石は明治四十四年二月、大患後の予後を養っていた長与胃腸病院を退院してから、六月長野へ講演に行くまで三、四、五と三カ月間ほとんど仕事らしい仕事は何もしないで静養している。しかし『断片』などには『彼岸過迄』の素材となっているものが、しばしば書き留められている。たとえば五月十日と考えられるところには、「〇西村が手紙をよこして電気遊園に勤務してゐるが当分嘱托で月給三十五円だといふ」とある。これは『風呂の後』の「十二」で「大連で電気公園の娯楽掛りを勤めてゐる」と通知してくる森本の素材であるし、また『停留所』の「四」の須永の話に出てくる「博奕打(ばくちうち)」の家の話は、ほとんどそのままが四月二十七日の『日記』に書き入れられている。

(3)

「事実を読者の前に告白すると、去年の八月頃既に自分の小説を紙上に連載すべき筈だったのである。」と、漱石は『彼岸過迄に就て』の冒頭に書いている。ここにいう「去年」は明治四十四年のことである。だから『日記』の「明治四十四年五月九日より十二月十五日まで」をみると、その最初の方から『彼岸過迄』の素材が続々という感じで書かれている。その二、三をさきほど書いておいた。にもかかわらず五、六カ月経った同年の十二月十五日になっても、「〇今日から小説を書かうと思つてまだ書かず。他から見れば怠けるなり。終日何もせざればなり。自分から云へば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com